『亜欧堂田善江戸の洋風画家・創造の軌跡』展関連ボランティア企画

ボランティアと一緒に見よう

第一章：画業の始まり　８階

🖌 №11　白雲　《会津津川冬景図巻》

―江戸の立体画

田善の故郷、須賀川出身の画僧白雲は松平定信に見出され『集古十種』編纂の資料収集のため、全国をまわります。谷文晁の影響を受けたとされる真景図（写生に基づく風景画）を数多く描きました。

会津から現在の新潟県へ至る冬の津川の光景を描いた本作は、まるでドローンで撮影したかのように立体的に描かれています。暗い雪空、深く雪に覆われた山里は簡略な筆致ながら実際の光景を見るよう。

江戸時代後期、街道が整備され多くの人々が旅をし、実際に各地の光景を目にするようになると、これまでの山水画からよりリアルな真景図が求められるようになりました。（S.N）

第二章：西洋版画との出会い　８階

🖌 №19　亜欧堂田善　《素描（乗馬図）》

―四十の手習い？

構想段階の下絵でしょうか、とてもラフな感じです。

片足を直角に曲げた馬に、西洋の衣装を着た人物が乗っています。バックは山の稜線と街並みの線が描かれ、余白には試し描き？のような文字のようにも見える線が。人物のゆるーいお顔と馬の優しげな目元にほっこりします。

これから素晴らしい作品が生まれたと思うと感慨深い気持ちになります。

40 代にして松平定信に仕え、新しい環境に身を投じた田善さん。新しいお仕事に真摯に向き合う姿に頭が下がります。（M.S）

🖌 №20　司馬江漢　《オランダ馬図》

―斬新な構図は何処から学んだ？

リーディンガーの『トルコの馬飾り・諸国馬図』―江戸時代の洋風画家を惹きつけた輸入書で同時期の秋田蘭画・小野田直武も利用している。―をもとに描いた油彩画。リーディンガーは動物や狩りの様子を表した作品で人気のあったドイツの銅版画家。

手前の池や遠くの家、木、空の様子は江漢が付け加えたもの。又、江漢は小野田直武に絵を習ったともいわれている。前景を一馬と人物と木―拡大、木が上に向かって小さくなる遠近法等の構図は描く画題は違うが小田野直武の《東叡山不忍池図》と共通していることが多いように感じます。（K.K）

🖌 №22　亜欧堂田善　《洋人曳馬図》

―47 歳のスタート！

時代は江戸。洋人が馬を引く姿はどこで見たのだろう？お手本があったのだ。田善を見いだした松平定信所有のリーディンガーのトルコの馬飾り・諸国馬図。“学ぶは真似るから“どこかで聞いた言葉を思い出した。

技法の確立していなかった腐食銅版画を数年でマスターする田善。江漢が言うようにまさに『日本に生まれし阿蘭陀人』。細かな作業に老眼はなかったのかと下世話なことが頭をよぎる。作品のサイズは小さく、通り過ぎないようご注意を。（S.H）

第三章：新たな表現を求めて－洋風画の諸相　８階

✐　№30　亜欧堂田善　《海浜アイヌ図》前期

―格好つけたポーズと奇怪な岩

弓を構えて格好つけているアイヌの男性。銅版画を模写する中で気に入ったモチーフがあると自分の作品に取り入れるという事をしています。男性のモデルはリーディンガーの『トルコの馬飾り・諸国馬図』の中にいます。また、この岩やアイヌの様子は谷文晁の実弟・島田元旦が蝦夷地調査の際に書き記したものが元と考えられています。

以前、当館で展示された元旦の《蝦夷地真景図絵巻》には、沢山の奇妙な岩や崖が描かれていました。実際にこのような岩があったのでしょう。波の様子も独特ですが、どこから着想を得たのでしょうか？（S.U）

✐　№42　亜欧堂田善　《今戸瓦焼図》後期

―煙フェチシズム？

浅草寺の近くの今戸焼の竈。土人形・瓦焼き等は今戸の名物となっていた。

立ち上がる煙は隅田川界隈の名物となっており煙が立ちのぼる竈の風景を描写。彼が生まれ育った須賀川は製瓦業が盛んで子供の頃から立登る煙を飽くことなく眺めていた。数多くの作品には煙が描かれており煙に特別な関心があった。

銅版画にも本図と同構図の作品がある。

後の広重「名所江戸百景」《墨田河橋場の渡かわら竈》や国芳「東都名所」《浅草今戸》の中に同様の風景が描かれている。(K.K)

✐　№42　亜欧堂田善　《今戸瓦焼図》後期

―煙は故郷の思い出

隅田川沿いに立ち上る煙は今戸瓦を焼くときのもの。田善は子供のころから煙を見るのが好きだったそうだ。５０才前後で初めて見た江戸の風景の中に煙を見つけ、さぞかし故郷を懐かしんだことだろう。

もくもくと黒い煤を吐きながら、窯はお江戸八百八町を覆う瓦を焼き続ける。岩絵の具では表現できない煙を田善は、新しく身に付けた油絵の具という手段で描いてみせた。（S.A）

✐　№43　亜欧堂田善　《両国図》後期

―登場人物がいっぱい

福島県須賀川から江戸へ出てきた田善。さぞかし人の多さにびっくりしたことだろう。

この作品は力士ふたりを中心に隅田川沿いの風景を描いているが、よく見てみると左の「大黒屋」の二階に芸者さんが三味線を弾き、隅田川の夕景を楽しむ侍がふたり。縁台には草履を脱いだ男がふたりくつろぎ、道には行き交う芸者達や力士に腰をかがめる宿屋の主人の姿も。

それだけではありません。目を凝らすと町並みの遠くにも人、人、人。おまけに隅田川の奥に架かる両国橋にも人がぎっしり。いったい何人の登場人物がいるのでしょうね。（S.A）

✐　№43　亜欧堂田善　《両国図》後期

―人物がなんかちょっと変？

町屋の並びと川の風景はカチッとした遠近感と広々とした空間を醸し出している。橋を行き交う人々や橋桁の下から覗く遠くの景色まで細かく丁寧に書き込んでいる。それなのに人物像はなんだか変な感じ。なんで顔が小さいの？ 江戸時代なのにみんな長身。

おまけに顔つきがなんだか似通っている？ 腰をくの字に曲げた商人がいると思えば船頭なんてみんな直立しているし。ゾロっとした着物の裾は汚れて大変じゃない？

実は若いころ学んだ月僊の影響で生涯続いている。西洋の写実と画僧月僊譲りのホンワリ感が溶け込んでいてなんだかおもしろい。（S.U）

✐ №44　亜欧堂田善　《江戸城辺風景図》

―油彩で美しい風景画を画く！

護持院ヶ原付近の景色―今の東京国立近代美術館あたり。向かって左側に江戸城の石垣と堀が見える。堀端の道と並木道はカーブしながら左奥へ。透視図法を用いるにうってつけの構図。

当時の江戸は緑豊かな町だった。油彩画は司馬江漢の目が空と海に向けられたと同様に田善の目は木々の緑の美しさに向けられた。

絹本油彩は絹地に油絵具で描かれる。絵具は輸入品ではなく「それらしいもの」を自分で調合したようだ。（K.K）

✐ №47　亜欧堂田善　《三囲雪景図》

―雪景色

地平線低くどんよりした冬空、江戸雪景色。

日本海側の冬は、光ささぬどんよりした日が多く、それに対し、太平洋側の冬は、青空の日多し。

北ドイツやオランダでよく使われる冬の季語に「グレイスカイ=灰色の空」がある。光豊かな冬の太平洋側の人々にとって、グレイスカイは馴染みない冬景色かと思う。蘭画が雪の多い地方でヒットしたのも、うなずける。秋田蘭画に対し、この隅田川の東岸から北をのぞむグレイスカイ名画を私は江戸蘭画と名づけたい。（M.Sa）

✐ №54　亜欧堂田善　《花下遊楽図》

―今春のお花見は品川御殿山へ！

江戸の庶民がお花見を楽しむ様子が描かれています。お店は花見団子ならぬ豆腐田楽売りで、調理に励む夫婦の傍らにいる白い犬が愛らしく、微笑ましい作品になっています。田楽売りのマスコット犬でしょうか。

陰影をつけた桜幹の立体感や油彩を使いこなした細かい桜の枝と満開の花が見事に表現されています。見下ろすと品川宿、先に江戸湾を望み、はるか向こうに房総半島が霞む、高台からの風景描写には西洋の遠近法が活用されています。

この見晴しの良さに感嘆し、奥になだらかな丘陵の形に感興をそそられ、絵筆を揮う田善が想像されます。（Y.Su）

第四章：銅版画総覧　８・７階

✐ №120－22　亜欧堂田善　《銅版画東都名所図　品川月夜図》後期

―女性の身に着けているは着物 OR ガウン？

二十五図からなる小型江戸名所図の中の一作品。海に面した妓楼からの風景。水面に映る月の光と、女性の姿を照らし出し、その陰を作り出す行灯の光。立体表現・遠近法的な構図と陰影法で表現。

銅版画の描き方としては多彩な線刻―数種類のクロスハッチングを使用。風景銅版画に人物の表れていないものは一点もない。全て署名「亜欧堂」と場所(画題)が刻記してある。

歌川広重の「名所江戸百景」《月の岬》はこの作品からの着想であるのではないかとも指摘される。（K.K）

✐ №170　亜欧堂田善　《大日本金龍山之図》

―細かい人物描写にご注目

参詣客の途絶えることの無い浅草寺ですが、この大きさで見ると迫力が違います。

田善は風景画に人物を描き入れていますが、この作品の中にも沢山の人々が描き込まれています。扇子を持った人、笠を被った武家とその従者、笠を手にした旅人、親子連れ、奥様と連れとにペコペコしている従者。何より驚くのは、建物の陰の中の人がきちんと陰の中に溶け込んでいることです。陰に入っている人達は身体にも斜線を付けて暗さに同化させています。人々の様子も面白いですが、日向の人物と日陰の人物とを明確に描き分けているところにもご注目です。（S.U）

第五章：田善の横顔―山水と人物　７階

🖋　№221　亜欧堂田善　《七福神之図》

―悠々天命を楽しむ

無事、定信の命を果たし帰郷した田善は、銅版画道具一式を他人に譲り肉筆画に専念します。商家の多い須賀川では、七福神図などの吉祥画の需要が多く、田善も多く描きました。師月僊の作風に似た人物はどこか飄逸で楽しそうで、まさに福を運んでくれるようです。

江戸で実際の風物を熱心に学んだ田善らしく福神達の持ち物も丹念に描き込まれています。絵の好きな少年善吉の老境の姿が思い浮かびます。（S.N)）

第六章：田善インパクト　７階

🖋　№　236　遠藤田一　《亜欧堂田善像》

―師を慕う

田善と同じ須賀川の商家出身で晩年の田善に師事した遠藤田一が描く最晩年の田善像です。太い眉とキリッと結んだ口許。目は一心に前を見据えています。松平定信に見出され、銅版画という未知に等しい領域を開いた田善の人格をよく描き出しています。

商家の出でありながら、功績により帯刀を許された田善は田一をはじめ、須賀川の人々にとっても誇りであったことが伺われます。

作者田一は、田善亡き後、谷文晁に師事します。（S.N）

第七章：田善再発見　７階

🖋　№256　渡辺光徳　《亜欧堂田善之像》

―洋風画の須賀川郷土の誇り、スーパー絵師、田善ポートレート

この銅版画は、同郷の絵師、田善を心から敬愛してやまない渡辺光徳の昭和六年の作品。47 歳まで、須賀川の染物職人だった田善が、偶然、白川藩主「松平定信」に出会い、幅広いジャンルの絵に挑戦。「やるべき事は全てした。我が絵師人生に悔いなし」と、穏やかに語りかけておられるように感じるのは私だけであろうか。

明治九年天皇の東北巡幸後、宮内庁お買上の名誉賜るなど、江戸の絵師、田善再発見は令和の今も続く。（M.Sa）

前期展示：１月 13 日（金）～2 月 5 日（日）　後期展示：2 月 7 日（火）～2 月 26 日（日）